
短編集

悠樹紫遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N3940T

【作者名】

悠樹紫遠

【あらすじ】

短編いろいろをつらつら書いていきます。

悠樹はゲテ食い野郎なので

「普通ではないもの」も覚悟してくださいませ。

前書き

イメージを形にする場が欲しかったので作成。

※別所で書いていたのですが諸々の事情で移転。

恋愛ものからダークなものまで様々な悠樹作品が集うと思います。

ギャグは面白くないことに定評があるのであまり増えないと思います。

グロ、ダーク系等はタイトルの始めに注意書きをしますが

基本的に増えないと思われま

す。なぜなら悠樹がハッピーED主義だから。

ノーマル基本、たまに百合や薔薇などなど。

つらつら綴っていききたいと思います。

それでは

この物語を手にとってくださった全ての方々に感謝を。

たとえば初恋なんて（前書き）

魔法使いの学校に通う二人の少年少女の物語。

学園一のエリート少女と学園一の劣等生の少年

今日も少女は不本意な公認ストーリーカーに追いかけられる。

たとえば初恋なんて

箒に腰掛けて空を滑空してきた少女は

ゆつくりと足先から大地に降り立つ

結った青みがかった黒髪が陽光を反射して美しく艶めき

青い瞳は宝石のよう。

「氷室だ、やっぱお嬢サマはちげえなあ」

「名門の出なんだから当たり前でしょ、つたく・・・悩みなんで無いんでしょね」

魔術師の名門氷室家の長女、氷室祐理＞ひむろ ゆうり＜

有名魔法使い育成学校の1年生。

成績も優秀、外見も悪くない、そんな彼女にも悩みはあった

「馬鹿、その理論で言うところであいつが……」

「お、いつもの来たぞー」

そう――

[illegible]

ドガアアアアン！と轟音を立てて祐理の少し後ろのほうに空から突っ込んできた少年。

「イテテ・・・」

土煙の中で腰をさすりながら、少年は箒に体重を預けながら立ち上がり

「おはよっ！祐理！」

にっこりと満面の笑みで少女にそう言った。

——コレだ。

「またおまえか、月華」

月華疾風＞げっか はやてく

同じく魔術師の名門月華家の次男。

金色の短い髪に新緑の瞳を持つ、外見はまあ悪くない少年。

祐理は額に手を当てながら、制服の土を払っている＞有名劣等生くを一瞥した。

「祐理が居るところに僕も居るの！」

「ポジティブにストーカー発言、いや＞宣言くしやがった、さすがだぜ月華」

＞これくが祐理の悩みの種だった。

「ねえねえ！今日は一緒に勉強しようよ！」

「おまえと馴れ合う気は無い」

「えー、でも僕は祐理のこと愛してるよ」

「いつそんなフラグが立ったのか教えて欲しいな」

「え！聞きたい！？じゃあ今日は祐理の家に泊まりに行くね！！」

「やはり遠慮しておこう、丁重にお断りする」

なぜこいつはこんなにも私に引っ付きまわるのか

普通ここまであからさまに拒絶されれば退くものではないのか
少なくとも今までの人間はそうだった。

——だが別に私の日常に支障は無い。

「altitonte!!＞アルティトナンテく」

雷による攻撃を避けて、

「aligente·buffera!＞アルジエンテ・ブフェーラく」

祐理は溜めていた魔力を発動させる言葉＞ワードくと共に放つ
氷の嵐による魔術は的を過たず、相手の女生徒に直撃した。

相手が戦闘不能になったのを確認して

『勝者、氷室祐理』という機械音声が木霊する中、祐理は踵を返して試験場を後にしようとした

その直後、壁が吹き飛んで『ぎゃあああああああ!!』という実に人間らしい声が響き渡る。

「月華 あああおいおい!! てめえ殺す気かあああああ!!?」

「あっははは・・・ごめんごめん噛んじゃったテヘツ★」

関わりたくない、非常に関わりたくなかった祐理は早々に足を動かそうとしたのだが

「あ! ゆうり いいいい!! 勝ったんだね! おめでとおおお!!」

「っ!!」

ドスツと背後から腹に腕を回される形で抱きつかれ・・・いや、タツクルを受けて声にならない声が出る。

「離せ!」

怒鳴ってみても効果が無いことは分かっている。

「ねえねえ祐理、これから一緒にお昼食べない?」

——他人に踏み込まれるのは嫌いだ。

過去の情景が一瞬脳裏を過ぎる。

『あんたが居るとつままないんだよ』

「いい加減にしろ」

自分でも驚くほど冷たい声が出た。

疾風が驚いているのも気配で分かる。

「私は馬鹿に時間を割くほど善人ではない」

「・・・祐理」

疾風の腕からずりりと抜け出して、階段を登っていく

一瞥した疾風は、ひどく悲しそうな顔をしていたけれど、祐理は足を止めなかった。

その背を見つめながら、疾風は拳を握り締めた。

（八つ当たりだ・・・）

分かっている、分かっていると言葉が止まらなかった。

屋上で風に吹かれながら、祐理は柵に背を預けて空を見上げる。

（ここまで拒絶すれば、さすがにあいつも私を嫌うだろう）
誰にも好かれたくない。

だって誰かに好かれることは
好きになることは――

「あ、氷室じゃーん」

「うわマジだ、最悪」

ぞろぞろと屋上に上ってきた女生徒三人。

どれも見覚えも面識もある三人だったが、今ではもう名前さえ思い出せない。

「・・・気分を害したようだな、失礼しよう」

「待てよ」

箒に手を掛けたとき、三人のうち一人が祐理の肩を掴んで前を向かせた。

「アンタさあ、最近調子乗りすぎじゃない？」

「・・・」

「月華に好かれてるとか思わないほうがいいよお？」

アンタみたいな疫病神、誰も好きにならないんだから、さ！」

ドンッと肩を押された衝撃は思いのほか強く

(――まずい)

箒に手を伸ばしても届かず

上半身が柵を越えて空に投げ出される感覚

「え、やだ・・・!!」

「きゃあああああああ!!」

少女達が声をあげる

その声がやけに遠く聞こえた。

(死ぬ・・・のか?)

スローモーションで視界を青空が埋め尽くす。

最後に浮かんだのは、疾風の悲しげな顔。

(せめて、謝りたかったな)

――こんな感情は、久しぶりだ

私が思うよりあいつは、月華は、私の日常に馴染んでいたのだろうか

「amulinare!>アンムリナーレ<」

重力に従って落ちていくだけだった体が、地面の寸前で風に抱かれる。

見上げた顔は、たったいま謝りたいと思った少年の顔だった。

「おまえ・・・なんで・・・」

「馬鹿! 間に合わなかったら死んでたよ!? 分かってる!?!」
そして不意に既視感を覚える。

――あれ・・・こんなこと、前にも・・・。

あの時は立場が逆だった。

同じ歳くらいの子供が木に登っていて、子猫を助けようとしているというベタな展開で――

薄い金色の髪と新緑の瞳。

「あ・・・」

「祐理！しっかりして！」

「おまえ、あの時の・・・」

「え？」

勿論枝は重さに耐え切れなくて折れた

なのみんな劣等生だからと晒っていた、自業自得だと

でも祐理は助けた、その時助けたのは・・・

「月華だったのか？」

「――」

瞳を見開いた疾風は、祐理を大地に降ろしながら苦笑した。

「思い出してくれたんだ」

にこりと笑ったあと、少年は屋上の三人に冷めた瞳を向ける。

「g e l o s i a > ジェロースィア <・・・醜いね、ほんとに・・・

」

新緑の瞳に影がさす。

こんな顔もするのかと、祐理は驚いたが

それよりも

「f i a m m a t a ・ b e l v a > ファアンマータ・ヴェルヴァ <

！

「きゃあああああ！！！！」

「馬鹿！そんな上級魔術・・・！！」

「加減はしてあるから大丈夫だよ、校長室は確実だろうけど向こうもタダじゃすまないでしょ？」

そこでふと違和感を感じた。

「・・・おまえ

なんで普通に魔術が使えるんだ？」

「え？だって劣等生なのは全部演技だったし」

祐理は悪くない

悪いのは演技が役者並の月華だ。

――

「イテテー・・・殴ることないじゃんねー」

たんこぶを頭に盛大につけられた少年は箒に腰掛けてふよふよ浮いていた。

「なんで演技なんてしてたんだ」

ベンチに座った祐理は疾風を睨みつける。

「祐理は馬鹿な子のほうが好みなのかなあって思ったんだよ、
だって同じ＞優等生＜の人間はもっとあからさまに拒絶してたから・
・

あと昔劣等生だったのはほんとだよ？」

空へと視線を映して、疾風はくすくすと笑いながら言葉を紡ぐ。

「祐理だけ、僕に手を差し伸べてくれたんだ、僕そっくりの初めて
だったから嬉しくて・・・そのまま初恋ってわけ」

「・・・だったら、言えば良かっただろ」

「祐理にとっては記憶にも残らない程度のことだって分かってたか
ら。

記憶に無いこと言われて詰め寄られたら、大抵は嫌でしょ？」

「・・・否定できない」

とんとと大地に降り立って、口を噤む少女の頬に手を伸ばす

「ねえ祐理、僕のことも名前で呼んでよ」

「・・・」

違う

こいつが命の恩人だから言ってやるだけだ。

誰に対してか分からない言い訳を考えながら、祐理はぎこちなく口を開く

「ゆーりー」

「は・・・」

「・・・」

「ハヤテ・・・」

その時の疾風の顔は、今まで見た中で一番嬉しそうだった。

心臓が僅かに高鳴ったのは気のせいだと言い聞かせる。

——人を好きなることは失うこと。

けれど同じくらい人を好きになることは——・・・

「だいすき！祐理！」

ぎゅうと抱きしめられて、祐理は赤くなった顔を隠すように疾風の肩口に顔を埋めた。

——どうしてこんなに、胸が満たされるのだろうか。

「やっべー、俺ついに幻覚が見えるようになったぜ」

「奇遇ね、アタシもいま目薬探してるところ」

「誰だよ幻覚魔法使ったのはー」

翌日、彼らが見たのは並んで登校してくる祐理と疾風の二人の姿だった。

たとえば初恋なんて（後書き）

ちよつと古いのをコピペしてきたのでよく覚えてなかったり・・・（漫画に起こして投稿しましたがそれは結果待ちです。

漫画verでは最後祐理が名前を呼ぶまで疾風の名前は出てこない。

たとえば二人は魔祓い師（前書き）

言いたいことはイロイロあるけれどあとがきで語ります。

たとえば二人は魔祓い師

「うあああああああ！！！！遅刻遅刻遅刻！！！！！！」

黒く長い髪を赤い紐で高い位置に縛った制服姿の少女はパンをくわえて走るといふ

ベタにベタすぎる格好で校門へ向かっていた、が

「げ」

門に立っている風紀委員を見るなり心底嫌そうな顔になる。

「タイムオーバーだ神宮寺」

無情にも予鈴が鳴り響く

ああせめて>コイツくじゃなかったらと思わずにはいられない。

「いいじゃん静のケチ馬鹿クソ真面目！！ギリギリセーフだったって！！」

「予鈴はもう鳴っている、減点だ、暴言のぶんも追加しておいてやる」

「ちくしょおお！！アンタだって口わりいくせに！！」

「どこぞのクズが来るまで待ってやっていた親切な俺に暴言を吐いたほうが悪い」

「いまクズって言いやがった！人権侵害だと思います！！」

「五月蠅い」

さっさと身を翻す風紀委員の青年、神泉静>みいずみ しずかく銀色の髪と金色の瞳の美青年。

（ちくしょー、顔が良いってだけで特別扱いだもんなあー）

ガラガラと教室の扉を開けながら、女の子達に囲まれている静を一瞥して

べ、と舌を出して席へ向かう。

「はよ、嵐」

前の席からかかった声に嵐と呼ばれた黒髪の少女は顔を上げる。
茶色に染めた髪以外は平凡な少女が笑顔で嵐のほうに体を向けていた。

「はよー、千秋」

「相変わらず仲悪いねえ、シズカくんと」

「もうあいつ死ねば良いと思うわー、絶対あたし風紀委員のブラックリストに載ってるし」

「まあ毎日毎日遅刻して門乗り越えてくればねー」

「聞こえてるぞクズ」

「って!!」

ぱかっと頭を叩かれて、後ろを向けば話の渦中の人物。

「だから!クズクズってあんたのほうが風紀乱してんでしょ絶対!」

「おまえにしか言っていないから問題ない」

「問題なくねえよ!どこが問題ないんだよ!!差別反対!!」

「ブラックリストの筆頭で居たくなかったらせいぜい>努力<することだな」

鼻で笑って去っていく青年に嵐はギギギ・・・と歯を食いしばる。

それを眺めていた千秋は言葉にはせずに呟く

(それってつまり、>特別<ってことじゃないのかなあ・・・嵐が
気付くわけではないけど)

思わず苦笑いが零れた。

――あたしが毎回遅刻するのには理由がある。

夜遊びしてるとか雑誌読んどるとかそんな女の子らしい理由ではないけど――

宵闇を駆けて、制服姿に似合わない刀を構え

[illegible]

未だ人間の姿を保つ影に斬りかかる。

――神宮寺＞じんぐうじくの家系は代々巫女の家だ

この日本の各地にはたくさんの神職があるが、その中の一つ魔祓いの刀を受け継ぐ家系、でもつまり＞そういうの＜は他にも居るわけで――

斬つても斬つても沸いてくる影に舌打ちをした時
いつもどおり嫌な奴の真言が聞こえた。

「臨兵鬪者皆陣列在前！」

複数の影を一瞬で滅する＞雷く。

「相変わらず要領が悪いなクズ」

厭味。たたく言。て来るこの男、
 > 神泉静く。

「あたし一人でどうにかできたっつもの！邪魔しないでよ！」

「だったら一秒で片付けろ、悪樓＞あくるくの邪気で気分が悪い」

——神宮寺家と同じく魔祓いの家系にある神泉家、同じ地域に居るだけに昔からお互い犬猿の仲だ——

「せいぜい明日遅刻しないように頑張るんだな、無駄だろうが」
身を翻す青年に向かって思い切り舌を出してやる。

「余計なお世話だっつーのシズカちゃん!!」

——つまるところ、あたし神宮寺嵐は毎晩魔祓いに忙しいせいで遅刻するのである——

「うおおあああああああ！！！！！！デジャヴーーーーー！！！！！！」

パンをくわえながら再び全力疾走という、昨日もやったような格好で校門目指して走る。

しかし

「うげっ」

目線の先には厭味な笑みを浮かべた神泉。

「アウトだ神宮寺、減点」

キーンコンカンコン・・・という音が無情にも響く。

「だあああああ！！！！セーフだったしょ！！！！？」

「相変わらず＞力の加減＜がなってないな、そんなだからいつまで経っても起きれないんだ、クズ巫女め」

「うっせ！！学校でまで魔祓いの話すんなっつの！！」

もぐもぐと食パンを飲み込みながら一步踏み出そうとしたときだった――

パンツと音を立てて学校の窓ガラスが一瞬で破裂するように割れサッカーゴールや木が吹き飛び倒れていく

「・・・ちよつと、オイタが過ぎるんじゃないの？」

頬を嫌な汗が伝う。

学校よりも大きな、＞影く。

恐らく＞普通の人間くには見えていない。

「神宮寺、先に言っておくが突っ走るなよ」

隣に立っていた静はすでに札を手をしている。

嵐の赤い瞳が底知れぬ闇を宿し、右手からずるりと刀が伸びるそれを手にして、嵐は大地を蹴った。

「シズカちゃんの世話なんかにならねっつの！！」

「おい！！」

——あたしの武器は＞刀＜で、静の武器は＞呪符＜
どっちが前に出るべきかなんて、説明するまでもないじゃん——

伸びてくる黒い腕を切り裂いて、本体を切り裂く
けれど

「な!？」

斬られた体はすぐに再生し、そこから伸びた腕に首を絞められる

「——ッ!!!」

「この馬鹿!!」

静が大地を蹴る

「雷帝招来!」

一閃の雷が影の腕を切り落とし

大地に投げ出された少女の体を静が抱きとめる

「突っ走るなど言っただろうが!」

「だっ……て……」

——これじゃあ——

——>昔<と何も変わらないじゃん——

——『俺と嵐は……』——

繋いだ小指、それはずっと昔のこと。

(怖い)

幼いながらに長い刀を構え、迫ってくる影に立ち向かう。

(怖いよ)

切り裂いても切り裂いても、子供の力ではキリが無い。

『臨兵闘者皆陣列在前!』

あの時もそうだった。

黒い手が少女に伸びたとき、少年の真言が聞こえた。

『だいじょうぶか！？嵐！！』

『・・・だいじょうぶ』

銀色の髪と金色の瞳。

悔しかった。

——静の武器は呪符で、あたしの武器は刀
なのに静に守られてるなんておかしいじゃん
あの頃からだろうか、二人の仲に亀裂が入ったのは——

静をあからさまに避けるようになった。

一人でも戦えるんだって証明したくて努力もした。

あたしが静を避けても、家を理由にすれば別におかしいことじゃない。
い。

そのうち、静もあたしを避けるようになった——

「馬鹿嵐、俺がアイツの心臓までの道を開く、だからおまえがトド
メを刺せ」

「・・・分かったよ」

立ち上がってもう一度刀を構える。

「臨兵闘者皆陣列在前！」

静の放った呪符は悪樓の左胸に直撃し
円状に影が開いたその中に見える>核<

「消えろおお！！」

それ目掛けて、刀を突き立てる。

核たる石は粉々に砕け、影は霧散した。

——いつからあいつはあたしの名前を呼ばなくなったのか。

「ちくしょおおおおおおおお!!! 絶対間に合わねえええええええ!!!」

本日も彼女は全力疾走。

(窓ガラス全部ぶっ飛んだんだから普通休校じゃねえの!?)
視界の先には

「うわぁ最悪!!!」

やっぱり神泉静。

「遅いぞ嵐」

「うっせ!!! なんであんたが連続で・・・」
きょとんと静を見上げる。

「いまあたしの名前・・・」

「昨日も呼んでやっただろうが、馬鹿嵐」

「な、なんで・・・!!? 恐っ!!! 熱あるんじゃないの?」

「失礼な奴だなおまえ」

ぽふっと頭に手を置かれて、嵐は首を傾げる。

「おまえが俺の前に出たがる理由は・・・分かった、避けられる理由も分かった」

「——」

「だけどな・・・」

静は目線を逸らしてこほんとわざとらしい咳払いをした。

「好きな女に守られなきゃならない男の気持ちも少しは考えろよ」

「へ・・・」

「ほら、もう行くぞ」

逃げるように校舎へ向かっていく静の背中を眺めながら、嵐は呆然

としたあと頬を真っ赤に染める
けれどすぐに笑って後を追いかけた。

「シズカちゃんかわいいー!!」
「ば・・・!! 五月蠅いぞ馬鹿!!」

——『俺と嵐は、二人で戦えばきっと無敵だ』——

たとえば二人は魔祓い師（後書き）

悠樹のパターンから抜け出そうとして失敗した作品。

※悠樹のパターン←

- ・不幸な女の子が居る
- ・なぜかひつついてくる男が居る
- ・ほだされて終わる

というわけで試行錯誤したけれど

「やっぱり今回も駄目だったよ」（・・ω・・）

そして静・・臨兵闘者皆陣列在前じゃなくて

中盤はむしろ急々如律令じゃないか・・？

・・悠樹に真言の知識が皆無な時点で大差ない問題かもしれないが。

これはまさか、変態の集い!?(前書き)

前置き、悠樹は誰が何愛好家でも自分に関係なければ大丈夫だ問題ない。

これはまさか、変態の集い!?

——桜の花弁が青空に舞う、なんて良い天気なんだろう、清々しいなあ

<俺>、桜塚真白くさくらづか ましろ>も今日から高校生!

わけあって地元を離れたから、実家を出て初めての寮生活

どんな人が居るのかなあ、楽しみだなあ! 寮は相部屋だけど、良い人達だといいな!——

「じゃあ、桜塚さんは今日からこの部屋で暮らしてもらうから・・・私はここまでで」

「はい!」

三十路くらいの女性教師に連れられてやってきた部屋の少し前で、教師は足を止めて真白の背を押した。

勇んでドアを開けようとしたとき、ふと女性教師がく可哀想なモノ>を見る目で真白を一瞥し

「・・・頑張ってね」

と言っで行ったが、新入生なのだから頑張るのは当たり前だ。

栗色の少し長い髪を髪留めで止めている真白の服装についてはお咎め無しらしい

他の生徒はだいたい黒髪だったが、まあ言われないのだから良いのだろう。

ここに来る前、両親はそれほど猛反対していた

だが、なぜか最後だけは涙と笑顔で見送ってくれたのだ、頑張らないわけにはいかない。

「こんにちは・・・」

そんな俺はドアを開けたまま思わず思考が停止した。

「・・・誰だい？」

金色の髪に青い瞳の青年がこちらを見ているがそれはどうでもいいんだ

いや、こいつもこいつでなんで金髪碧眼なんだよと思うけどここ日本だし

でもそれ以前にそいつの机の周りが何かのく死体(?)>で溢れかえっていることが重要なんだ

「新入りの子ではないかしら・・・？」

「ヒッ!？」

いつの間に背後にまわられて居たのか、黒い髪に黒いセーラー服に黒いタイツに黒い靴の少女が耳元で囁く

(黒い!黒すぎる!)

浮き出た肌が異様に白く見えて正直恐い

その少女は両手で60センチくらいの人形を抱えていた。

「あ?なに?新入り?」

二つある二段ベッドの上がもそりと動いてオレンジ色の癖っ毛に茶色い瞳の青年がもぞもぞと姿を現す。

「ああ、一年生がここに一人入ると聞いていたよ、桜塚真白くんで合っているかい？」

それはもう王子様を絵にしたような青年は真白の手を取って部屋の中へ促す。

「え・・・と、合ってるんです、が・・・」

突っ込んでいいのか、いいのか、この異様な部屋に対して。

王子様のような青年が向かっていた机には謎の瓶にく死体らしき何か>が入っているし

部屋の奥には人形がずらりと並び、所々腕や足や体の模型らしい一部が落ちているし

＜血＞らしきものの入った瓶も転がっている。

「そうか、僕は春ヶ崎咲人＜はるがさき さくと＞、2年だけ一応この部屋で言うリーダーだ

みんなも自己紹介くらいしたまえ」

その言葉に、ベッドの上の青年が軽く手を挙げた

「俺は龍ヶ崎唯＜りゅうがさき ゆい＞、咲人と同じ2年だからヨロシク」

そして背後からぼそっと黒い前髪で目元が隠れた少女が名乗る

「・・・私は秋朱雀雅＜あきすざく みやび＞、2年生・・・」

二段ベッドは二つあるのだが、最後の一人は自分だろうか

「えと、俺は――ッ!？」

名乗ろうとした瞬間、誰かに手を取られ右手に激痛が走った

「これはA B型の味だね」

恐る恐る視線を向ければ、銀色の緩くウェーブのかかった髪に緑色の瞳の・・・少女(?)

どうやら親指を血が出る勢いで噛まれたようだ。

「え、あの・・・」

「こら! 春香! また噛み付いて、生徒指導室に呼ばれても知らないぞ!」

怒鳴る咲人、そして最早涙目の真白を見上げて、背の低いその子は悪戯っぽく笑った

「僕、架栖芽宮春香＜かすみがみや はるか＞、飛び級で2年生だよほんととは中学2年生・・・あ、言っとくけど男ね?」

――怖い

(なんだこの部屋、おかしい、こんなの絶対おかしいよ普通じゃないよ!?)

怖い怖い怖い怖い

「え・・・おい! 真白くん!？」

様々なことがいつきに起きすぎて、俺の脳はブラックアウトした。

——こんなの絶対おかしいよ……って何かのアニメでも言ってたな……

いや、世の中にこういう人が居るのは知っていたし、＜俺に関係なければ＞俺は気にしないほうだと思う

でも俺、今日からここで三年間暮らすんだよね？

おかしいよ、嘘だと言ってよ、父さん母さん、俺……無事に帰れない気がする

ああ、でもなんかこの部屋の人達みんな美形だったな
そこだけうらやましい——

顔も勉強も人並みの真白は代わりに性癖も人並みだ、＜一応＞。

翌日、真白は敷布団で目覚めた

その頃には先輩一同の姿は無かった

（夢だった？夢だったらいいなあ、あ……ナイトメアか！そうかもな！）

この親指の噛み跡もきつと寝ぼけて自分で噛んだんだ、そうに違いない

女の子と見紛う美少年に噛まれたなんて嘘だそうに違いない

死体っぽいモノや人形や体の一部なんて最近じゃガチャポンで出てくるじゃないか

「とりあえず学校……」

服は昨日のままだった、まあさすがに女性が一人でも居る部屋で着替えは無いだろう

（……いや待て、なんで男女混合の部屋なんだ）

イロイロと疑問を抱きつつも突っ込んだら決られる気がしたので触れずにおこうと真白は起き上がった。

（風呂入ってないけど、まあ仕方ないか……時間無いし）

黒の男物のブレザーに身を包み、部屋を出て校門へ向かう……と・

・

(ん?)

きやあきやあと何やら黄色い悲鳴が聞こえる。

「咲人さまああああ!!」

「きやあ!いま唯さまと目が合ったわ!!」

「雅さまは今日も麗しいわ!」

「春香くくん!!」

——・・・嘘、だろ?

学校まで続く道にぎっしり集った女生徒多数。

とてもではないが真白が堂々と歩ける状態ではない

(待て!おかしいだろこの展開!!?)

微笑んで手を振っている咲人や唯、

昨日連れていた人形を連れていない雅、生意気そうなオーラを振り

まいて歩く春香。

とてもではないが真白が堂々と出て行ける雰囲気ではない。

「いやいやいや!!あの人達絶対普通じゃあ——」

「桜塚くん」

青ざめて両手で頬を覆う真白に昨日の女教師が哀れなものを見る目で声をかけてきた

「あ!先生ちよっと・・・今からでも部屋・・・!!」

「真白くん、空き部屋はあの部屋しか無いの・・・そして、あの部屋のことは<禁句>なのよ

もしあなたが噂でもばら撒こうものなら、この学園からの追放だけではなく社会的地位も略奪するわ」

「はあ!?!」

「春ヶ崎、龍ヶ崎、秋朱雀、架栖芽宮・・・みんなあなたと違って生まれながらの<エリート>なのよ

少しくらい聞いたことがあるんじゃない?」

そう言われてみれば、そんな錚々たる苗字を聞いたこともある気が

する・・・＜テレビ＞で。

つまるところ彼らは有名人、将来を約束された人イコール・・・

「一般人のあなたに味方してくれるほど、社会は甘くないわよ・・・」

そう言って女教師は身を翻した。

その後、真白は全てを＜諦めた＞。

知ってはいけないことを知ってしまったのだからもう遅い。

高校を中退というのも、自分の人生に多大な影響を与える

まして社会的地位の略奪、エリート集団相手では現実味があって恐いならば、＜慣れ＞だ、慣れてしまえば問題ない。

朝は咲人達が去った後にこっそり登校し、帰れば異空間が待っている。

「真白くんてさ、どこに住んでるの？」

先輩方とは学年が違う真白はこの質問に毎回困らされるのだ。

「一応、寮に住んでるよ」

「寮生なの！？うらやましいなあ〜！咲人さまや唯さまと同じところに住んでるなんて！」

「寮って限られた人しか入れないんでしょう？いいなあ〜！」

キラキラした周囲の目線から全力で目を逸らしつつ

帰った後のことを想像して真白は静かに息を吐いた。

——それから半年、俺の順応力は人並み外れていたようで、こんな生活にも慣れ初めていた。

「やはり美しい女性は死体に限るよ」

死体雑誌(?)を眺めて感嘆の息を吐く咲人は平常運行で

「はぁ?死体は死体でも人間はバラになってこそ意味があんだろー」
それに突っ込みを入れる唯、バラが<薔薇ではない>ニユアンスは
なんとなく察していただきたい。

「・・・人形が一番よ」

うつとりと我が子のごとく腕の中の人形を撫でる雅。

「死んだら血もへったくれもないじゃないか、美味しくないよ。人
形は論外」

普通に教本を眺めながら突っ込みを入れる春香。

ここ数ヶ月観察した結果、真白は察した

- ・咲人↓ネクロフィリア(死体愛好家)
- ・唯↓アポテムノフィリア(肉体欠陥愛好家)
- ・雅↓アガルマトフィリア(人形愛好家)
- ・春香↓ヘマトフィリア(血液愛好家)

(つべー、俺もなんかソツチの理解力が養われてきてんなー)

勉強机に向かいながら、現在進行形で交わされる会話をスルーする
ことに全力を捧げる

要は自分に被害が無ければいいのだ
だが・・・

「真白も女性で死体だったらきつと美しいだろうね」

「は?」

二つあるうちの隣の勉強机で雑誌を見ていた咲人がまじまじと真白
を見つめていた。

「あー、それ分かる、なんか真白のパーツって男のわりにキレーだ
よなー」

初めて会った時と同じく二段ベッドの上に居る唯が同意し
真白の背を嫌な汗が伝う。

「え・・・いや、俺はふつつーの一般人だし!!」

「なんだか・・・春香と同じ美しさがあるわよね・・・」
くすっと笑って雅が告げる。

待て、この展開はまずいぞ・・・
殺されるんじゃないか、偉い人や金持ちならやるんじゃないか。

「あああああああああ！！！！！！！！！！ほら！！俺より綺麗な
人なんていっぱい居るじゃないですか！

先輩方女の子にモッテモテですし！選びたい放題じゃないですか！
それに俺結局、男ですし！！」

危ない、これ以上は危ない、本能で察して真白は珍しく大声を出した。

「まあそれもそうだよなー・・・キレーはキレーでも野郎だもんな
あ、もったいね」

先ず唯の興味が削がれた、チャンスだ！

「僕は男性でも死体だったら・・・」

「いやいやいや！どうせなら女性のほうが良いですよ！！ですよ
唯先輩！！」

「そーだなー、咲人ソッチの趣味まで持ってんなら俺に近づくなよ
？」

「ハハハ、冗談だよ」

無事咲人も雑誌に視線を戻した

「男の子のお人形も好きだけれど・・・真白さんは人間なものね」
雅も興味を失ったようだ。

良かった、危なかった。

「みんな分かってないなあ・・・」

安堵の息を吐く真白を横目に、椅子に腰掛けていた春香が小さく呟
いたソレは、真白の耳にも届かなかった。

——真白には墓場まで持っていかなくてはならない＜秘密＞がある。
これが知れたら本当に殺されかねない——

その日は日曜で、引く手数多な先輩方は誰も部屋に居なかった。

日曜日は真白の＜癒しの日＞だ

恐い会話が聞こえることもないし、春香に噛み付かれることもないし何より＜秘密＞がばれるんじゃないかとびくびくすることもない。

「よし、風呂入ってこよっかな」

時刻は16時、先輩方はまだまだ帰ってこないだろうし

他の生徒もきつとこの時間なら居ないだろう。

大きく伸びをした後、真白は馬鹿でかい寮の大浴場に向かいきよろきよろと辺りを伺い浴場に誰も居ないことを確認して服に手をかけた

この寮にはこの大浴場しかなく、つまり男女混浴

どこまで男女合同なんだと最初は思ったが、先述の通りの順応力で慣れた。

本当に行水程度に入って、すぐに風呂を出て服を着始める

この寮の中で、部屋に居る先輩以外で他の生徒に会ったことは無いとはいえ

「油断は大敵だ」

うんうんと頷きながら胸に＜さらし＞を巻き終えたところで

「つかれたー、風呂行こうぜ咲人ー」

「そうだな、女性の買い物というのはなぜあも長いのか」

——だばつと冷や汗が出た。

普段帰りは軽く0時を回る男性陣こと咲人と唯が帰ってきたのだ

男湯のほうから入っている真白は最早窮地

＜男＞としてここに居る真白に＜女湯＞から入るという選択肢は無いのだ。

即座にシャツを取り、バサツと羽織って扉に背を向けもどかしいボタンを留めようとしたのだが

焦るばかりでうまくボタンが留まらない

「あ？誰か居るのか？」

「春香じゃないか？」

まずい、まずすぎる。

「おー！風呂で真白に会うの初めてじゃねえ！？」

そして後姿を確認して唯が楽しそうに言う

「そうだな・・・普段は誘っても一緒には来ないのにな」

咲人も不思議そうに首を傾げる。

「?、おい、真白?」

この時、すでに真白の脳は死んでいた。

どう言い訳を考えるかより、**＜墓場までの秘密＞**が……

足音が近づいてくる、おそろく唯だ。

「なんでだんまりしてんだよー？」

ぐいっと肩を引っ張られ、おそろく真白だけではなく唯も思考が停止した。

「
・
・
・
あれ？」

「ごしごしと唯が目をこするので、咲人も不思議そうに覗き込む」

「どうした？」

「いや、あっちゃならねえ<ふくらみ>があるっていうか」

•
•
•

咲人もごしごしと目をこすった。

「……真白、君……まさか……」

そしてトドメはさらに後ろからやって来た。

「真白はく女」だよ」

春香の聲がしんとした着替え場に響く。

[illegible]

まず意識が戻ってきたのは唯だった。

――BADエンディング――

部屋に戻ってから、雅が「まあ・・・」と声をあげた。

「女性だったの、真白さん」

「・・・」

顔面蒼白な真白は、罵声を予想して俯いていたのだが

「納得したわ・・・」

なぜか雅はうんうんと頷いた。

雅だけではない、唯も咲人も春香もだ

「おかしいとは思ってたんだよなー、この寮に＜一般人の野郎＞が入って来るなんてさー」

「最初に話を受けたとき、僕もおかしいとは思ったよ、でもまさか男性を装った女性だとはね」

「へ・・・？」

罵詈雑言は無い、代わりに全員が何かに納得していた。

「ここ、＜ふつーの人＞は入れないの

理由はまあこの部屋見れば分かるでしょ？ここに来れるのは良家の坊ちゃんとお嬢様だけ」

春香の説明を受けても、まだよく分からない

「きっと君さ、＜売られた＞んだよ」

椅子に足を組んで座った春香から放たれた言葉に呆然とした後

「どういふこととおおお！？」

部屋を飛び出して真白は携帯から実家に電話をかけていた。

『まあ落ち着きなさいよ真白』

「落ち着けるか！この狸！！！！！」

春香の言葉を要約すると、女性の雅が男性陣ばかりの中にぽつんと居るのは

なんとかこの異常性癖の男性陣が

<生身>の、<生きた>、<女性>を好きになってはくれないかという

三カ条の元に、一年前この寮に入れられたらしいが、

残念なことに雅も異常性癖で男に興味が無かったのだ。

「母さん俺が殺されてもいいの！？俺がバラにされてもいいの！？俺はホルマリン漬けも嫌だし花瓶に飾られる趣味ないよ！？人間だから！！！」

『いやあ、だって真白ももう年頃じゃなあい？そろそろ結婚も見据えないと——』

「<血痕>だったら毎日見てるよ！！あんだだけ反対してていきなり手のひら返したみたいだとは思ってたけど！！！」

「娘より金が大事かああああああああ！！！！！！！！！」

——両親の涙と笑顔は大金を得た故のものだった。

（もう誰にも頼らない、っていう名言もあったなあ・・・アニメでよろよると部屋へ戻る道を歩き、力なく扉を開けようとしたのだが「まゝしろ！」

背後からおそらく唯にしがみ付かれて衝撃でドアを開けそのまま床に頭からダイブした

「いつ・・・！！唯先輩！？」

「いやあ、女だって言われるといいフォームだよなあ真白」

——嫌な予感がする。

そう、少し前のお話だ、唯は真白のパーツが好きだと言ったがく男だから>と興味を失った

・・・まさか、ありえない、あつてはいけない

「言われてみれば女性にしか見えないな」

待て、＜バラ＞も＜ホルマリン漬＞も前述の通りお断りだ。

「僕は最初から気づいてたよ、二人とも鈍すぎるんじゃない？」

「女の子だったら・・・お人形にしてもきつと可愛いわ」

＜男ではない＞と分かった後の生活はそれはもう凄まじく

桜塚真白は再び＜諦め＞を知るしかなかった。

これはまさか、変態の集い！？（後書き）

真白は最初の時点ですでに男装少女の予定でした。

単にノーマルではない性癖について書きたかったのですが

何を書きたかったのか一切伝わらない内容に・・・（・・ω・・）

男装していて実際自分をさほど女と認識していないあたり

真白も普通の性癖ではないわけですが。

これは続きを書きたいなあと思っています、短編集なのに。

ぜひ咲人と唯には大喧嘩してほしいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3940t/>

短編集

2011年10月7日10時32分発行